

## 【鍋島賞（最優秀演題賞）】

### 越智 紳一郎

愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学

#### 研究課題、タイトル

Clozapine treatment is associated with higher prescription rate of antipsychotic monotherapy and lower prescription rate of other concomitant psychotropics: A real-world nationwide study.

#### コメント

この度はJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2022および鍋島賞という大変栄誉ある賞を授与していただきまして、大変光栄に存じます。誠にありがとうございます。

2022年6月9日～13日に開催されました今回のCINPは、台湾およびバーチャルによるハイブリッド形式で開催されましたが、私にとって初めてのバーチャルの形での国際学会への参加、および初めてのoral presentationといういくつかの初めて尽くしの発表となりました。事前にプレゼンテーション内容をレコーディングするというのも、初めてのことで、当初は勝手がわからず、また周りに誰もいない中でプレゼンテーションするという独特の雰囲気にも苦労いたしました。発表の内容といたしましては、私達は「精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究」(EGUIDEプロジェクト)を行っておりまして、講習の効果を検証するために、入院直前と退院時の治療行動を調査しております。今回、私達は退院時クロザピンが処方された治療抵抗性統合失調症患者、およびクロザピンが処方されなかった治療抵抗性統合失調症患者を含む統合失調症患者での退院時の抗精神病薬および他の向精神薬を含む単剤療法および多剤併用療法などの薬物療法の特徴を検討いたしました。その結果、退院時にクロザピンが処方されていた治療抵抗性統合失調症の抗精神病薬単剤療法率は、クロザピンが処方されていない群より有意に高く、さらに、他の向精神薬の併用もない完全な抗精神病薬単剤による治療率も有意に高かったことを見出しました。一方で、リチウムはクロザピンが処方されていた治療抵抗性統合失調症で有意に高く、日本の白血球数の基準との関連が示唆されました。これらのことから、治療抵抗性統合失調症の適切な診断と、クロザピンの適切な処方が多剤併用療法を減少させる上で重要である可能性を見出しました。

本研究の成果は最近International Journal of Neuropsychopharmacologyに掲載されましたので、ご興味がおありの方はご一読頂けますと幸いです(Ochi et al. 2022. Int J Neuropsychopharmacol. doi: 10.1093/ijnp/pyac036.)

なお、現在、University of Alabama at Birminghamに留学中ですので、写真のように、賞状もバーチャルの形で、日本から取り込んで送っていただきました(笑)。

最後に本研究の発表にあたりまして、ご指導ご鞭撻を頂いた多くの先生方に、この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。また、現在も続いておりますCOVID-19が1日でも早く収束に向かいますことを心より願っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。





## 添田 萌

東京都医学総合研究所依存性物質プロジェクト  
東京歯科大学口腔健康科学講座障害者歯科口腔顔面痛研究室

### 研究課題、タイトル

Single-nucleotide polymorphisms of the SLC17A9 and P2RY12 genes are significantly associated with phantom tooth pain.

### コメント

このたび、2022年6月9日から13日に開催された33rd CINP Hybrid World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2022)に参加させていただきました。今回、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2022を受賞させていただきました、誠に光栄に存じます。

私は今回の学会では、「SLC17A9とP2RY12遺伝子の一塩基多型と幻歯痛との関連」について発表させていただきました。幻歯痛とは、歯の神経を取る抜髄処置や抜歯に続いて起こる持続的な痛みや感覚異常のことで、口腔顔面領域に生じる神経障害性疼痛の1つです。日常の診療においても診断が難しく、症例数も少ないため、原因や治療法など不明な点が多く、多くの歯科医師を悩ませている疾患の1つです。本研究では、ATP関連遺伝子であるSLC17A9とP2RY12が幻歯痛の原因となる可能性を示唆しました。この研究が、今後の幻歯痛の治療や病態の解明に少しでも役立つことができればうれしく思います。今回は残念ながら現地での参加はできませんでしたが、多くの発表を拝聴することができ、有意義な学会となりました。大変な情勢の中、開催に向けてご尽力いただいた関係者の皆様には改めて感謝申し上げます。

また、ご指導ご鞭撻いただいた皆様にこの場を借りて深く御礼させていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

# 徳竹 伯洸

富山大学医学薬学研究科 薬物治療学研究室

## 研究課題、タイトル

CB1 receptors in the mice prefrontal cortex regulate spatial cognitive function.

## コメント

このたび、2022年6月に開催された33rd CINP Hybrid World Congress of Neuropsychopharmacologyに参加・発表を行いました。この発表に対し、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2022をという大変栄誉のある賞をいただくことができ、大変光栄に思います。この場をお借りして、選考委員の先生方および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

今回オンラインでの開催ではありましたが、著名な先生方の講演やポスター発表を一つ一つじっくりと視聴できるなどWeb開催ならではの利点もあり、最先端の研究を知る良い機会となりました。

私は、これまで「大麻による記憶障害の機序解明および治療ターゲットの探索」を目的とし、研究を行ってきました。大麻は、脳に作用し記憶等の認知機能に影響を与えることが報告されています。また、大麻の乱用は、覚醒剤やコカイン等のより依存性の高い薬物使用への入り口となる可能性があります。大麻にはこのような危険性があるにも関わらず、「大麻は他の薬物より安全」、「大麻には依存性はない」など科学的根拠に乏しい誤った情報を信じている人々が多くいるのが現状です。私は、研究者として、科学的な知見に基づき、大麻の危険性を正確に発信していくと共に、今回の研究発表が、大麻使用障害の病態解明や治療法の発見、創薬に繋がればと考えております。

今回の受賞を励みに、さらに研究を進め、神経精神薬理学の発展に貢献できるよう精進して参ります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



## 平井 志伸

東京都医学総合研究所

### 研究課題、タイトル

High-sucrose diets contribute to brain angiopathy with impaired glucose uptake into the brain parenchyma and psychosis-related higher brain dysfunctions in mice

### コメント

2022年6月9日から開催されました第33回 国際神経精神薬理学会 (The International College of Neuropsychopharmacology) にオンライン参加いたしました。その中でポスター発表をさせていただき、この度JSNP Excellent Award for CINP 2022を獲得いたしましたことをここにご報告させていただきます。本発表内容の研究開始から10年近く経過し、最近論文発表させていただきましたが、最終的にこのような栄誉ある賞の受賞という形で結実したことを大変喜ばしく思うと共に、今後もより本研究分野に貢献していく気持ちを新たにす良い機会となりました。

発表内容としましては、統合失調症、双極性障害の新規マウスモデル開発を通じて思春期の砂糖の過剰摂取が上記疾患の発症に寄与する可能性を実証しました。そして、そのマウスを利用した新たな精神疾患発症機序の同定を目指し、脳実質へのグルコースの取り込み低下と脳の毛細血管障害という新たな表現型を見出しました。血管障害に関しては実際の患者脳でも検証を行い、糖負荷以外のストレス、及び遺伝的環境下でも同様の障害が存在すること、すなわち一般性の確認に至りました。これらの成果は、精神疾患発症の背景に、例えば血管障害などに起因する栄養素の取り込み低下といった代謝障害が潜在的に存在する可能性を示唆しており、今後、代謝制御といった新たな観点からの精神疾患発症の予防、治療法の開発が見込まれます。

また本研究の遂行にあたり多くの先生方にご指導を賜りました。そして研究室のスタッフの方々、学会関係者の方々にはいつも研究活動を支えていただいていると、この機会に改めて感じました。皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

最後に、当初はオンサイト開催が企画されていた今回のCINP2022ですが、COVID-19の流行が収束していないことから日本からの参加は基本的にオンライン開催となりました。幼い子供がいる私としましては、時間や場所に拘束されないオンライン開催は、育児をしながら最新の研究結果に触れられる貴重な機会となりました。その一方で、台湾国内ではオンサイト参加が可能であり、活発な議論が交わされたとお聞きしております。今後も様々な立場の研究者が自身の研究成果を発表できるハイブリッド開催のメリットが生かされることを望みつつ、世界中のCOVID-19流行の一刻も早い終息を祈念して受賞コメントを終了させていただければと存じます。



## 藤野 純也

東京医科歯科大学精神行動医科学

### 研究課題、タイトル

---

Neurobiological mechanisms of burnout in medical professionals

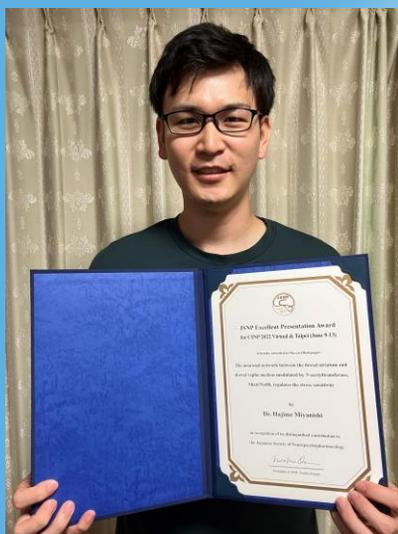
### コメント

---

2022年6月9日から6月13日に開催されました第33回国際神経精神薬理学会（33rd CINP Hybrid World Congress of Neuropsychopharmacology）に参加させていただきました。今回、新型コロナウイルス感染症拡大のため、台北とバーチャルのハイブリッド形式で開催されました。私は、バーチャル形式で参加させていただきましたが、国内外からの参加者が非常に多く、神経精神薬理に関する最新の知見に数多くふれることができました。

私はこれまで、認知神経科学、脳画像研究を専門に、個人差や多様な精神疾患の病態理解に取り組んで参りました。今回は、医療従事者における燃え尽き症候群の兆候と脳灰白質の関係に関する研究結果を報告させていただきました。臨床家・研究者の方々から、今後の発展につながる貴重なコメントを多数いただき大変幸いに思っております。

今回、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2022を受賞させていただきましたことを大変光栄に思っております。日本神経精神薬理学会の先生方、所属機関・研究協力施設の先生方をはじめ、本当に多くの方々にご指導いただきましたことを、心より感謝申し上げます。神経精神薬理学分野の発展に貢献ができますよう精進して参りますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



## 宮西 肇

富山大学医学薬学教育部薬物治療学研究室

### 研究課題、タイトル

The neuronal network between the dorsal striatum and dorsal raphe nucleus modulated by N-acetyltransferase, Shati/Nat8l, regulates the stress sensitivity

### コメント

2022年6月9~13日にvirtual・現地 (Taipei) 開催のハイブリッドで行われました第33回国際神経精神薬理学会 (33rd CINP Hybrid World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2022) に参加いたしました。CINP2022を開催していただいた先生方ならびに運営スタッフの皆様から心から感謝いたします。今回、JSNP Excellent Award for CINP 2022を受賞させていただきましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。個人としては2度目のCINPの大会参加となります。この賞に関しては、前回も応募させていただきましたが、この度初めて受賞することができ、大変嬉しく、そして光栄に思います。今後もこの領域においてにより一層技術を磨き精進していこうと思います。

“The neuronal network between the dorsal striatum and dorsal raphe nucleus modulated by N-acetyltransferase, Shati/Nat8l, regulates the stress sensitivity” のタイトルでポスター発表の機会を頂きました。私はこれまで背側線条体に着目し、うつ病発症の根底にあるストレス感受性の調節メカニズムの解明に取り組んできました。そして、背側線条体-縫線核間の神経ネットワークのストレス感受性への寄与に関する研究成果を報告させていただきました。現在は、神経細胞種の特異性などより詳細なメカニズムの解明を目指しております。今回は、ハイブリッド開催ということもあり、久しぶりに海外へ向かい、現地にて研究者の皆様とディスカッションできることを楽しみにしておりましたが、いまだ収まらない新型コロナウイルスの影響もあり、願い叶わずオンラインでの参加となりました。しかし、実験の合間にポスターを見ることができるというオンラインのメリットも感じながら参加でき、とても有意義な勉強となる学会となりました。

最後になりますが、今回の受賞にあたり、ご指導頂きました先生方、ともに研究に取り組んだ研究室の皆様、及び学会関係者の皆様へ深く御礼申し上げます。この受賞を励みにこれからも神経精神薬理領域の発展に貢献できるよう努力していきたいと思っております。今後ともご指導どうぞよろしくお願い申し上げます。



## 柳田 悠太郎

熊本大学大学院生命科学研究部分子脳科学講座

### 研究課題、タイトル

Serotonin transporter promoter activity regulated by polymorphisms and DNA methylation affects depression and cognitive decline in old people: The Arao study

### コメント

この度はJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2022を頂き、誠にありがとうございます。2022年6月9日から13日に開催されました33rd CINP Hybrid World Congress of Neuropsychopharmacologyに参加致しました。

セロトニントランスポーター遺伝子のプロモーター領域には、5-HTTLPRと呼ばれる多型領域が存在します。低活性を示すS型と、ストレスやうつ病発症との関連が報告されて以来、5-HTTLPRと精神疾患との関係について多くの研究が行われてきました。近年の大規模研究により単純な関連は否定されましたが、5-HTTLPRには欧米人には報告のない、民族集団特異的と思われるアレルが日本人集団に存在することや、近傍に転写活性をDNAメチル化で制御するCpG部位が同定されており、より複合的な解析が必要だと考えられます。一方で、これまでの研究は、うつ病を中心とした精神疾患における若年～中年期における関連研究が大多数であり、老年期における機能に着目した研究はあまり実施されていません。

私は、熊本県荒尾地区で実施されている合計約1,500名の高齢者コホートデータを用い、5-HTTLPRおよびDNAメチル化状態と認知精神機能との関係を調べました。5-HTTLPRの遺伝子型を実際の転写活性に即して検討した結果、低活性多型を有する高齢者集団において、認知機能低下とうつ傾向との相関や、認知機能低下に伴う高メチル化を認めました。高活性多型を持つ集団では、これらの関係は認められず、海馬体積に対する正の効果が認められました。以上の結果は、セロトニントランスポーターの老年期固有の機能について明らかにし、認知症およびうつ病の治療や予防につなげる上で有用だと考えています。今回のCINPは新型コロナウイルスの影響により、台北市の会場とオンラインによるハイブリッド開催となりました。現地参加が叶わなかったのは残念ですが、ハイブリッド開催の利点も多く感じた学会でした。具体的には、同時開催の複数の講演をオンデマンドで視聴できる点や、ポスター発表の資料を時間をかけて閲覧できる点です。

今回の研究および発表を行うにあたり、ご指導頂いた研究室の先生方をはじめ、共同研究者の皆様大変お世話になりました。また、大規模コホート研究から得られたデータを使用しており、多くの先生方のご協力の下で研究を進められていることを日々実感しております。今回の受賞を励みとし、新たな知見を報告できるよう、今後も研究活動に誠実に取り組もうと思っております。



## 山西 恭輔

兵庫医科大学 精神科神経科学講座

### 研究課題、タイトル

Impaired neural inflammation and stress tolerance against acute restraint stress in Interleukin-18-deficient mice

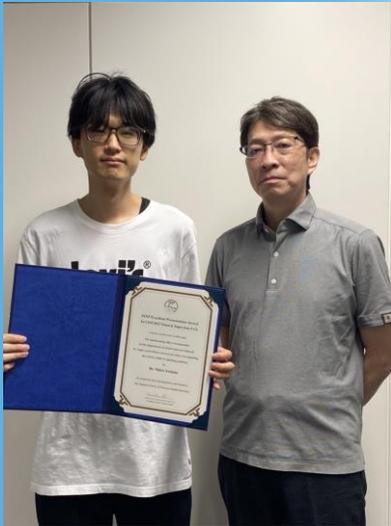
### コメント

この度、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2022を受賞しました。このような大変名誉のある賞を賜る事が出来まして、大変光栄に存じます。ご指導を賜りました先生方と学会関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

2022年6月9日～13日に第33回国際神経精神薬理学会(33rd CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP 2022)にオンラインで参加させていただきました。本学会は現地開催とオンラインのハイブリッド開催でしたので、状況が許せば現地参加を考えておりましたが、状況の予想が立たずオンラインでの参加となりました。オンラインでの視聴は色々な発表を時間問わず行える点と何度でも繰り返し視聴が可能という点にあり、大変勉強にはなりますが、現地で様々な先生方と議論や質問を行える、いわゆる『立ち話』が出来ない制約は非常に大きく感じました。

私は精神疾患と免疫、脳内炎症という課題を中心に研究を行っており、最近はいわゆるストレスとインフラマソームを中心とした脳内炎症について動物や細胞を使用した基礎実験を行っております。私の恩師の一人であります岡村春樹名誉教授は炎症性サイトカインとしてのインターロイキン18を世界で初めて発見された方であり、大学院在籍時より御指導賜りました。卒業、学位取得後、現在の精神科神経科学に戻りましたが、松永寿人主任教授の多大なご高配を賜り、臨床をしながら基礎実験をさせていただいております。本学会では、その研究成果の一つを発表させていただきました。インターロイキン18というインフラマソームを構成するサイトカインの一つが欠損する事で、ストレスに対する過活動性行動変化が観察され、さらにストレス誘導により惹起された脳内炎症が遷延するというものです。これらはインターロイキン18が欠損していない野生型マウスでは観察されない事象であり、インターロイキン18が日常生活におけるストレスに対する生体内の恒常性に深い関与があるのではないかという事を報告させていただきました。今後も精神疾患と免疫につきまして、研究に邁進して参ります。研究発表、成果が少しでも関連する精神疾患の病態解明、治療標的につながり、最終的には精神疾患で苦しむ患者様へ還元する事が出来れば幸甚に存じます。

最後になりますが、COVID-19の収束とこれまでの日常生活が一刻も早く戻りますようお願い申し上げます。また、本賞の受賞にあたり、臨床をしながら基礎研究を続ける事に理解を示してくださった松永寿人主任教授をはじめ、研究を支えて下さった先生方・皆様方、学会関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。また今後ともご指導ご鞭撻、賜りますようお願い申し上げます。よろしくお願いたします。



## 吉田 樹生

名城大学大学院薬学研究科病態解析学 I

### 研究課題、タイトル

The ameliorating effect of memantine on the impairment of social behaviors induced by single social defeat stress as juveniles via regulating the GluN2-ERK1/2 signaling pathway

### コメント

2022年6月9日から13日に開催されました33rd CINP Hybrid World Congress of Neuropsychopharmacologyに参加し、The ameliorating effect of memantine on the impairment of social behaviors induced by single social defeat stress as juveniles via regulating the GluN2-ERK1/2 signaling pathwayという題目で発表を行いました。幼若期マウスに単回の社会的敗北ストレスを負荷することで幼少期におけるストレス関連精神疾患のモデルを作製し、メマンチンの有効性とその作用機序を検討した研究です。この度、光栄にもJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2022という大変名誉ある賞を受賞することができました。また、幸運なことに受賞の連絡をいただいた前日に、その研究成果がNeuropharmacology誌にアクセプトされました。

神経精神薬理学分野の国際大会は、2019年に福岡で行われた6th Congress of AsCNP以来の参加となりました。今回大会は、残念ながらオンラインでの参加となり、世界各国の研究者と直接言葉でのコミュニケーションとはいきませんでした。が、全てのセッションがオンデマンドでいつでも視聴可能であったり、コメントや質疑をweb上で投稿することができ、オンライン開催でのメリットも感じることができました。また、今回のCINP大会は、免疫系の精神疾患への関与やCOVID-19パンデミックにおけるメンタルヘルスに関する演題も数多くありました。私は、今回発表させていただいたテーマとは別に、脳内免疫系に着目した精神疾患の病態解明を目指した研究を行っており、ウィズコロナ・ポストコロナ時代において、研究者としてどのように社会に貢献していくことができるかを考える良い機会となりました。

最後に、本賞の受賞にあたり、野田幸裕教授をはじめ御指導・御鞭撻を賜りました先生方、本研究に携わった皆様、学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。新型コロナウイルス感染症の1日も早い収束と次回のモントリオール大会、そして2年後の東京大会が現地開催され、世界各国の神経精神薬理学研究者が一堂に会することができることをお祈り申し上げます。